



録音や編集は全て自分たちで行う



伊藤 英子 さん
いとう えいこ



岩間 眞樹子 さん
いわま まきこ



武田 郁子 さん
たけだ いくこ



越田 由美子 さん
こした ゆみこ



多田 左衛子 さん
ただ さえこ

利用したい方は

「声の広報」を利用したい、またはお近くに利用したい人がいる場合は、下記にご連絡ください。

総合政策課 企画調整班 Tel. 0193-42-8724



「声の広報」利用者
藤原 正 さん
ふじわら ただし

声から気持ちが伝わってくる

活動が始まった時から利用していて、震災後も再開してくれてとても助かっています。毎月集まって活動するのは大変なこと。感謝しています。気持ちを込めて読んでくれるので、内容や一生懸命さが伝わってきます。

このような地道なボランティア活動をしている人たちがいることを、住民の皆さんにも知ってほしいと思います。

「知りたい」に伝えたい
現在代表を務める岩間眞樹子さんは、設立の翌年から活動に参加。「当時は観光ボランティア

めない人が、耳が聞こえるのであれば、広報を通して町の出来事を伝えたい」と話す伊藤英子さんは、「そよかぜ」の設立当時のメンバー。「住民みんなに知る権利があるのだから、グラフや表、写真に何がどう写っているかまで声で伝えるのが理想だ」と言います。

ガイドを始めたところで、人前で話すのが苦手だったため、練習になると思い参加したのがきっかけ「だそです。利用者の皆さんが楽しみにしてくれているのを感じると言う岩間さんは、「例えばおめでたやおくやみの欄は、最初は読まないことにしていました。でも、利用者さんに読んでほしいと言われ、今では全部読むように。『知りたい』と思う気持ちって大切だと思います」と、ニーズに応えたい気持ちを語ります。

このような活動を継続してきたことが認められ、「そよかぜ」の皆さんは、平成25年に町の社会福祉大会ボランティア活動功労団体、平成26年には、岩手県社会福祉大会で大会長表彰を受賞しました。
目の不自由な人にとって、ラジオや音楽などはあっても、町の様子や出来事を伝えてくれるものは中々ありません。「そよかぜ」の活動は、そんな人たちの心の中に、町の姿を描き出す大きな助けになっています。



特集 まちの景色を届ける「そよかぜ」～声の広報ボランティア～

広報が読めない人にも、町の様子を伝えたい——。広報おおつちを朗読し、「声の広報」として届ける人たちがいます。

思いやりの「声の広報」

毎月、町の情報誌として発行される、「広報おおつち」。声の広報ボランティア団体「そよかぜ」の皆さんは、目が不自由で自分では読めない人のために、毎月一度集まり、広報紙の内容を録音しています。

「声の広報」の録音は、専用の録音機を使い、一人ずつマイクを手に、自分の担当ページを録音していきます。20ページもある広報ですが、世代別情報の一部を除き、ほぼ全てのページを読み上げます。お店の広告も一つ一つ読みます。「広告も大切な町の情報の一つ。特に最近、新しいお店や再建した懐かしい店名を聞くことで、聞く人がまちづくりをイメージできるようにしたい」と話すメンバーの皆さんの思いやりの詰まった広報は、長さ約2時間にも及びます。

この「声の広報」は、カセットテープなどに録音され、楽しみに待つ町内の利用者へ手渡されます。「広報を読みたくても読

東日本大震災乗り越え 仲間の思いを受け継ぐ

「そよかぜ」が活動を始めたのは平成15年の9月で、来月で15年を迎えます。前代表の小国真理子さん、町内で鍼灸師を営む藤原正さんが尽力し、町と協力して設立しました。平成23年には、11名で活動していましたが、東日本大震災津波により、メンバーはバラバラに。活動を休止せざるを得ませんでした。

しかし、翌年の4月、町内に残ったメンバーで活動について話し合い、「これまでの仲間の思いを受け継ぎたい」として何より、利用者の方々が声の広報を心待ちにしていると知り、活動を再開していくことを決めます。

震災後の広報の復刊から半年が経過し、再開後最初の録音が行われました。「久しぶりの録音と、前代表が亡くなったショックで、胸に詰まるものがあり、声が震えていたことを覚えていました」と話す伊藤さん。
代表の岩間さんは、「震災で亡

くなったり、大槌を離れてしまったりした仲間の事を思い、今までのメンバーたちが頑張ってきたことを、ここで終わらせたくない、やらなくちゃいけないと思って活動を続けました」と語ります。

15年間、多くのメンバーによって紡がれてきた思いは今も受け継がれ、「声の広報」となって利用者のもとへ届けられています。